

一般大学・学部生に焦点を当てた教員志望者増加ための考察

茨城県教育研修センター所長 安藤 昌俊

1 現在の教員採用選考試験の状況

文部科学省が平成31年4月19日に公表した「平成30年度公立学校教員採用選考試験の実施状況について」によれば、昭和54年度の全校種の受験者数を最高値(257,842人)として平成4年度の受験者最低値(110,949人)を途中経験したものの、平成30年度の受験者数(160,667人)を比較すれば、最高値の6割程度の受験者となっていることが確認できる。また、平成21年度(158,874人)から10年間の受験者数の傾向をみても、15万から18万人台を推移しており、極端に減少しているとは言えないが、平成25年度(180,902人)から平成30年度(160,667人)にかけて減少傾向が続いていると判断できる。

一方、採用者数と受験者数の割合、いわゆる競争率(倍率)からみると、平成3年度に競争率最低値(3.7倍)を経験したことは、受験者数が大幅に減少したことを受けて生じた現象であり、昭和61年から平成3年までの平成景気いわゆるバブル経済の影響を受けて、急激なインフレによって国民の平均所得が上昇したことなどを受けて、年を追うごとに大学生の就職状況が好転したことで、競争率が低下していったと容易に推測できる。その後、バブル経済が崩壊し平成不況期に入ると、競争率もV字回復を果たしていくが、採用者数減少の相乗効果を受けて、競争率は瞬く間に上昇し、平成12年度の採用者数最低値(11,021人)の時に、競争率最高値(13.3倍)を達成していくことになる。

こうして、競争率を概観することで平成21年度(6.1倍)からの10年間の傾向を判断すれば、教員の大量退職に伴う採用者数の増加が最大の要因となって、平成30年度(4.9倍)に向けて競争率が次第に低下しているという現状が容易に判断できる。一般的に言われている「教員離れ」という現象は、データから判断することは難しいと言えるのである。

<公立学校教員採用選考試験の受験者数・採用者数・競争率(倍率)の推移>

	受験者数	採用者数	競争率(倍率)
昭和54年	257,842(最高値)	—	—
昭和55年	—	45,651(最高値)	—
昭和56年～平成2年までは省略			
平成3年	—	—	3.7(最低値)
平成4年	110,949(最低値)	26,265	4.2
平成5年	112,771	22,821	4.9
平成6年	122,356	19,834	6.2
平成7年	136,551	18,407	7.4
平成8年	145,681	17,277	8.4
平成9年	146,932	16,613	8.8

	受験者数	採用者数	競争率(倍率)
平成10年	147,542	14,178	10.4
平成11年	145,067	11,787	12.3
平成12年	147,098	11,021(最低値)	13.3(最高値)
平成13年	147,425	12,606	11.7
平成14年	150,977	16,688	9.0
平成15年	155,624	18,801	8.3
平成16年	160,357	20,314	7.9
平成17年	164,393	21,606	7.6
平成18年	161,443	22,537	7.2
平成19年	165,251	22,647	7.3
平成20年	161,300	24,850	6.5
平成21年	158,874	25,897	6.1
平成22年	166,747	26,886	6.2
平成23年	178,380	29,633	6.0
平成24年	180,238	30,930	5.8
平成25年	180,902	31,107	5.8
平成26年	177,820	31,259	5.7
平成27年	174,976	32,244	5.4
平成28年	170,455	32,472	5.2
平成29年	166,068	31,961	5.2
平成30年	160,667	32,985	4.9

もう一つ別の観点から、受験者、採用者の学歴別内訳による国立教員養成大学・学部と一般大学・学部の動向を分析してみたい。

<受験者数と学歴別内訳>

年度	教員養成大学・学部	一般大学・学部	短期大学等	大学院
平成21年度	31,312(21.0%)	94,019(63.1%)	9,305(6.2%)	14,427(9.7%)
平成22年度	31,258(20.5%)	97,232(63.8%)	8,759(5.7%)	15,211(10.0%)
平成23年度	32,682(19.5%)	109,754(65.5%)	8,647(5.2%)	16,467(9.8%)
平成24年度	30,658(18.7%)	108,564(66.1%)	8,181(5.0%)	16,848(10.3%)
平成25年度	31,824(17.7%)	121,140(67.4%)	8,806(4.9%)	17,917(10.0%)
平成26年度	30,615(17.3%)	119,988(67.9%)	7,931(4.5%)	18,070(10.2%)
平成27年度	29,323(16.8%)	121,155(69.2%)	7,466(4.3%)	17,032(9.7%)
平成28年度	27,643(16.2%)	119,318(70.0%)	7,210(4.2%)	16,284(9.6%)
平成29年度	25,784(15.5%)	117,989(71.0%)	6,838(4.1%)	15,457(9.3%)
平成30年度	26,253(16.3%)	113,653(70.7%)	6,408(4.0%)	14,353(8.9%)

<採用者数と学歴別内訳>

年度	教員養成大学・学部	一般大学・学部	短期大学等	大学院
平成21年度	7,685(31.7%)	13,158(54.3%)	839(3.5%)	2,572(10.6%)
平成22年度	7,585(31.3%)	13,262(54.6%)	812(3.3%)	2,609(10.8%)
平成23年度	8,461(31.5%)	14,760(55.0%)	708(2.6%)	2,904(10.8%)
平成24年度	8,191(29.2%)	15,926(56.7%)	730(2.6%)	3,250(11.6%)
平成25年度	8,733(28.1%)	18,293(58.8%)	897(2.9%)	3,184(10.2%)
平成26年度	8,573(27.4%)	18,580(59.4%)	751(2.4%)	3,355(10.7%)
平成27年度	8,640(26.8%)	19,672(61.0%)	763(2.4%)	3,169(9.8%)
平成28年度	8,642(26.6%)	20,054(61.8%)	753(2.3%)	3,023(9.3%)
平成29年度	8,269(25.9%)	20,031(62.7%)	753(2.4%)	2,908(9.1%)
平成30年度	8,904(27.0%)	20,254(61.4%)	833(2.5%)	2,994(9.1%)

この2つの資料から言えることは、国立教員養成大学・学部生の教員採用選考試験の受験者数が減少傾向にあるということと、全体での採用者の割合も低下しているということである。一方、この資料で一番着目すべきところは、一般大学・学部生の受験の割合が増加していることである。平成25年度から現在まで全体の受験者数の減少傾向が続いているなかで、一般大学・学部生の受験者数がさほど減少していないこと、さらには受験者の割合が70%台にまで伸びており、採用者数を2万人台まで大幅に伸ばしていることに注目したい。

国立教員養成大学・学部生の教員採用選考試験の受験者数が減少傾向にあることだけでなく、教員就職率が低下していることは、文部科学省が毎年9月末時点で調査している国立教員養成大学・学部(44大学・学部)と教職大学院45校(国立39, 私立6)の卒業者の教員就職状況からも、容易に読み取ることができる。

例えば、平成30年3月の国立教員養成大学・学部の卒業生(10,960人前年度比144人増)の場合、正規採用・臨時的任用併せて教員就職者数は6,457人で、卒業生全体に占める割合が58.9%だが、7,8年前の62%からは3%程度も低下している現状である。

近年における国立教員養成大学・学部の教員就職率の低下については、長時間労働など教員の労働環境の一部が大きく焦点化され、「ブラック職業」などといった「負のイメージ」がマスコミ等によって創りあげられたことも要因の一つであるが、その影響は国立教員養成大学だけに限ったことではない。国立教員養成大学における「教員離れ」の主な要因として推測できるのは、平成24年頃から日本経済の回復基調が続いていることで、民間企業が採用数を増やしたことにより一般大学だけでなく、国立教員養成大学の教育学部系の学生にまでその影響が及んでいることである。教員に興味を持って学部選びをしたはずの学生たちにとって、教員以外の職業選択肢が広がったことは、教員就職率を向上させることを大変、困難にさせている。

以上のような教員を取り巻く採用の現状から、今後急激な教員受験者の増加があまり期待できない国立教員養成大学・学部生ではなく、教員受験者の割合が増加しつつある一般大学・学部生に焦点を当て、教員志望者増加のための手段や方策について考察して

みたいと考えている。

なお、今回の考察では、単なる現状分析に基づく仮説の構築にとどまらず、具体的な事業として実施したことで、有効性の検証を伴うを実証的な研究であるところに大きな特色と意義があるものと私は考えている。

<国立の教員養成大学・学部(教員養成課程)卒業生数等の推移>

	平成19年	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年	平成24年
卒業生数	10,131人	10,359人	9,962人	10,524人	10,479人	10,503人
教員就職者数	5,768人	5,869人	5,641人	6,274人	6,494人	6,466人
教員就職率※1	56.9%	56.7%	56.6%	59.6%	62.0%	61.6%
	平成25年	平成26年	平成27年	平成28年	平成29年	平成30年
	10,585人	10,709人	10,723人	10,888人	10,816人	10,960人
	6,485人	6,465人	6,486人	6,413人	6,414人	6,457人
	61.3%	60.4%	60.5%	58.9%	59.3%	58.9%

※1すべての卒業生数を母数とした場合

2 茨城県教育研修センターと茨城大学全学教職センターとの連携による教員志望者増加のための事業構築にあたって考えたこと

茨城大学全学教職センターの事業は、教員養成学部である教育学部の学生も参加することもあるが、人文社会科学部・理学部・工学部・農学部を含めた全学の学生を対象に教員を目指す学生を支援することを目的に行われている。私が茨城県教育研修センター所長に平成28年度に就任して以降、「教員の養成・採用・研修の一体化」を重点目標に掲げ、県内大学・教職大学院等との連携を強めて、講座・イベントを実施し今年で4年目を迎えるが、常に考えていたことは教職課程を持たない一般学部生に対する支援をどうするかということであった。私自身が一般学部出身者でもあることから、教職課程を履修することのハードルの高さを直に経験しており、大学4年生になっても早朝から夜遅くまで教職の講座を受けていたことを今でも思い出す。以前と比較して教職課程の単位数も増加している現在、教職課程を履修することがより困難になってきているのは、現代の大学生も実感していると推測される。茨城大学全学教職センター長の小川哲哉教授もそのことについて危惧されており、学生たちが自らの幼少期から青年期までの学校生活の中で憧れを抱いた教員という職業を実際目指そうと考えても、二の足を踏んでしまう学生が少なくないのが現状のようである。(しかし、「1 現在の教員採用選考試験の状況」でも既述したように、一般大学・学部生の教員採用選考試験の受験の割合はさほど減っていないのは事実ではあるが…)

では、どのようなことに取り組んだら、一般学部生に教員という職業に魅力を強く抱かせ、職業選択肢の一つとして考えてもらい、教員採用試験の実受験者を増やすことができるのか。そこで最初に考えたことは、「他の職業との比較」である。これまで国及び地自治体の教員養成の取組のほとんどが、教員の「やりがい」という特殊な部分だけ

に焦点を当て、他の職業では味わうことのできない感動や児童生徒との一生涯にわたる人間関係を築き上げることができる職業という部分を強調してきた訳であるが、それだけで今の大学生の職業選択に多大な影響を与えることができるのか、といった危惧を常々抱いていた。現代の大学生が持つ一般的な就職観とは、「職業の安定性」・「楽しく働けること」・「個人の生活と仕事の両立」・「人のためになること」などが、近年上位を占めており、そのため、公務員(国家・地方含めて)人気は続いていると言える。(一部の地方自治体では内定辞退者が増えているのも現状ではあるが…)

そこで、連携事業の大きな柱として取り入れたものは、教員が「ワークライフバランスのとれた職業なのか」、「安定性がある職業なのか」といった視点を他の職業と比較して分析できる専門家を招き、一職業としての「教員」を様々な観点から客観的に分析させ、大学生に提示して判断を委ねるということであった。教育関係者ではない専門家の分析によって、「教員」を様々な職業と同じまな板に載せ、美味しいものかどうかを大学生に味わってもらおうという実験である。

もう一つは、「ブラック職業」などの「負のイメージ」は本当なのかということ、大学生に判断させるために、実際に一般学部から高校教員として採用され3～5年程度しか経っていない若手教員をディスカッションに参加させ、苦労したことや今悩んでいることなどの「生の声」を直接届けることであった。

以上のことを念頭に置いて、連携事業を構築してみた。

3 連携事業「高校教師の魅力を考えてみよう」とは

令和元年9月19日(木)茨城大学で実施したこの事業に受講希望した学生は、24名(人文社会科学部6名・理学部9名・農学部3名・教育学部6名)であった。残念にも工学部の学生は校舎が離れた場所にあるので、参加しなかったのか、それとも民間企業に就職する学生がもともと多いため、高校教師という職業に魅力を感じる学生が少ない現状なのかは分からないが、国公立大出身の工業の高校教師が少なくなっている状況は、採用業務を担当したときからある程度は感じてはいた。

校種を「高校」と限定して設定したのは、茨城大学の一般学部生が教員採用試験を目指す場合、「中学」を目指す学生もいるが、多くは高校を目指しているからである。(学生がどの校種を目指しているかで、どのような形にも変えられる柔軟性のある事業であるのも事実ではあるが…)

まず、オープニングセレモニーとして茨城大学全学教職センター長と茨城県教育研修センター所長が事業構築の経緯を説明した後、公認会計士・税理士の谷田部博貴氏の「高校教員のライフプラン」と題した講義から開始された。この講義で使用された資料は、「安心できるマネープラン」「人生を豊かに過ごす働き方」「教育は未来への投資」という三つの分野に分けられている。内容的には次のとおりである。

パート1 「安心できるマネープラン」

・平均年収比較(高校教師, 県行政職員, 市職員, 県内地方銀行)

<ul style="list-style-type: none"> ・高校教師の年齢別年収の推移 ・民間企業との退職金比較 ・公立学校教員の年金 ・生涯賃金比較(高校教師, 県行政職員, 小中教員) ・大企業で崩れる終身雇用
<p>パート2 「人生を豊かに過ごす働き方」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校教師の平均の残業時間 ・休暇・振替等の状況 ・育児休暇・特別休暇の仕組み ・療養休暇・休職の仕組み ・福利厚生制度
<p>パート3 「教育は未来への投資」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育園・幼稚園の年間教育費(公立・私立) ・小学校の年間教育費(公立・私立) ・中学校の年間教育費(公立・私立) ・高校の年間教育費(公立・私立) ・大学の初年度教育費(公立・私立) ・幼稚園から大学までの教育費(公立・私立)

さて、事前に連携事業の大きな柱として考えた、教員が「ワークライフバランスのとれた職業なのか」、「安定性がある職業なのか」といった視点については、専門家の分析によると、高校教師は時間外勤務が他の校種や職業と比較しても短く、年収や退職金、年金等総合的な所得の面でも県内の他の職業と比べて優位にあり、各種の休暇や休職等の福利厚生面も充実しているという詳細な分析して頂いた。総合的に、他の職業と比較してワークバランスのとれた職業、安定性がある職業と専門家に評価して頂いたことは、意義深いものとする。

次に設定したのは、指導主事による英語と数学の模擬授業である。この授業で一番大切なポイントは、受講者である大学生全員に興味関心を強く抱かせることができるかという点である。たった1回の授業で学生全員を惹きつけるという要求度が大変高いことを実施させた訳だが、アンケート結果でも比較的高く評価されていた。

最後の締めくくりの部分は、若手の高校教師と大学生たちの全体的なディスカッションである。若手教師を選定したのは、大学生と年齢的にさほど変わらないことで親近感が持て、聞きにくいことでも平気で聞いてくれるのではないかと期待したからである。そのために、茨城大学の卒業生で人文・理・工学部出身の教職2年次から5年次までの5人の若手教師(国語・地歴公民・数学・理科・工業)に参加してもらった。予想どおりに大学生からの質問は、まさに生々しいというか、知りたいことをストレートにぶつけてくれるものがあり、若手教師側も何も隠さずホンネを言ってくれたので、1時間では足りない盛り上がりを見せた。大学生からの質問とそれに対する若手教師の応答の中で特に印象に残っているものは、次のようなものである。

大学生の質問	若手教師の答弁
<ul style="list-style-type: none"> ・部活動指導は大変ですか。 ・生徒指導で悩んだことはありますか。 ・長期間休んで旅行には行けるの？ ・出会いはありますか。 ・教材研究は大変ですか。 ・教師という職業は楽しいですか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒のために計画的にやっている。「大変」と思ったことはない。 ・大変かどうかは、取り組む個人の問題。 ・生徒・保護者と一緒に悩みながら考え、時間をかけて解決したとき、悩みよりも喜びが優る。 ・毎年どんなに忙しくても、海外旅行に行っている。メリハリをつけて働いている。 ・研修や出張で様々な先生方とは出会う。個人差はあるが、教員は出会いがない職業ではないと思う。 ・専門科目でない地理を教えているので教材研究をしっかりとやっているが、当然なことで大変と思ったことはない。 ・毎日やっているが、自分のために必要と考えている。 ・辛いこともあるが、楽しいときもある。トータルして教師を選んで良かったと思う。

以上のように、若手教師と大学生とのホンネでのディスカッションは、事業を計画した者にとっては、想定外の内容も含まれていた。それは、大学生からの質問ではなく若手教師の答弁の中に含まれていた。「教材研究は自分のために必要」「部活動が大変かどうかは取り組む個人の問題」など、20代の高校教師がこれ程まで自分の職業を客観的に認知できていることに驚きと嬉しさを感じた次第である。

4 連携事業「高校教師の魅力を考えてみよう」における大学生の評価

茨城大学全学教職センターによる18名の大学生のアンケート集計結果については、次のようなものである。

講義「高校教員のライフプラン」	割合(%)
1 とても良かった	78
2 まあまあ良かった	22
3 あまり良くなかった	0
4 全く良くなかった	0

模擬授業「数学」	
1 とても良かった	70
2 まあまあ良かった	30
3 あまり良くなかった	0
4 全く良くなかった	0
模擬授業「英語」	
1 とても良かった	100
2 まあまあ良かった	0
3 あまり良くなかった	0
4 全く良くなかった	0
若手教師とのディスカッション	
1 とても良かった	94
2 まあまあ良かった	6
3 あまり良くなかった	0
4 全く良くなかった	0

さらに、自由記述については、次のような様々な感想や意見を頂いた。

講義「高校教員のライフプラン」について
<ul style="list-style-type: none"> ・給与まわりについてまとめた内容が得られたのが良かった。 ・大学卒と院卒の違いも知りたかった。 ・教師になったときの将来の現実的なことを知れて良かった。教師は沢山の生徒との関わりを持っていくことが仕事なので、教師自身が常に安定・安心している必要があるため、保障が充実していると感じた。 ・ライフプランが具体的で分かりやすかった。 ・教師の給与面の知識を持っていなかったもので、知ることができて良かった。 ・教師としての人生を現実的に考えることができた。 ・給与を他の職業と比較して、詳しく知ることができて良かった。 ・給与以外に様々な休暇などを知ることができて良かった。 ・以前から知りたかったことが、具体的に聞けて良かった。 ・思っていた以上の収入があり、福利厚生でもブラックではないことが分かり、これまで以上に教師の仕事に興味を沸かした。 ・ライフプランについてこれまで講義を受けることがなかったため、貴重な経験となった。
模擬授業「数学」について
<ul style="list-style-type: none"> ・数学の教員ならではの現在の教育への意見が聞くことができて良かった。数学が好きな人に向けた指導であったことが残念だった。 ・様々な解法で解いていて興味を持てた。 ・教師についての話の中に所々で問題を採り入れて説明していて楽しかった。今まで

習った内容がそれぞれの分野として習っていたこともあり、内容どおしの結びつきが大切だということが分かった。

- ・実際の授業の仕方や工夫，時間の使い方などを知ることができて楽しかった。
- ・内容的には特殊でしたが，自分にはない視点を持つことができて楽しかった。
- ・生徒のレベルに応じて授業内容を変えたり，単元を関連づけた授業の作り方を知ることができて勉強になった。
- ・簡単なテーマ一つとっても様々な方向から検証できること，そういった手法が高校の授業では可能だということを初めて知った。
- ・一番苦手感じていた数学の授業の恐怖心が和らいだ。

模擬授業「英語」について

- ・先生の雰囲気も良く，とても楽しかった。
- ・英語が苦手な自分でも楽しいと思える授業で，教師になったらこんな授業をしたいと思った。
- ・高校教師としての大切なことを知ることができた。
- ・帰納的な考え方を学ぶことができた。
- ・自分が受けたことがないような授業を受けられて勉強になった。高校生の時にこのような授業を受けたかった。
- ・今の授業はこのように変化しているんだなど，新しい発見があった。
- ・ペアワークしたり発言することで，生徒の立場に立ったり，大切な授業のポイントを知ることができた。
- ・教職に就きたいという思いが強くなった。

若手教師とのディスカッションについて

- ・大学生になってから高校の先生と話す機会がなかったので，今の目線で考えることができ，書物より説得力がありためになった。
- ・進学校についても詳しく話を聞きたかった。
- ・教師の実生活が聞けて良かった。
- ・年齢が近いので，リアルな体験談が聞けて良かった。
- ・想像できないような意見や体験談を聞けて良かった。
- ・高校教師の実状を具体的に知ることができて良かった。
- ・普段では聞くことのできないようなことも聞くことができて良かった。
- ・ホンネや真実を聞くことができ，みんな楽しそうで「本当になりたい」と思えた。
- ・様々な経験の違う先生方から貴重な話が聞けて，今後のモチベーションが高まった。
- ・残業や休暇，出会いなど教師の実生活の様子を知ることができて良かった。
- ・もっとしっかりしたディスカッションかと思ったら，リアルなトークであったためあっという間に時間が過ぎた。大変なことも嬉しいことも知ったうえで，自分ははどうするか選びたいと思った。
- ・休日や部活動など普段聞くことができない貴重な話を聞くことができた。
- ・教職選択以前の入学直後に，このような企画があればとても良いと思う。

5 「一般大学・学部生に焦点を当てた教員志望者増加のための考察」で実施した連携事の総括

当初、事業構築にあたって大きな柱と考えていた2つの目的については、アンケート結果から判断すれば、達成することができたのではないかと考えている。大学生のほとんどが、高校教師は「ワークライフバランスのとれた職業」で、しかも「安定性がある職業だ」と客観的に認識したこと、また、「ブラック職業」などといった「負のイメージ」は正しい見方ではないということを知ることができたことは、といても大きな収穫であった。

今回、茨城大学全学教職センターと連携させて頂き、このような事業を試行的に実施したが、その有効性が検証できたと考えている。そして、最終的には一般大学・学部生の教員志望者を増加させるため、今後は、こうした取組の規模をさらに拡大しようと考えているところである。茨城県という一つの地方自治体の教育機関のこうした取組が、モデルとなり、全国的な展開になっていけば、一般大学・学部生の教員志望者が次第に増加し、最終的には受験者総数そのものが増加することで、全体的な競争率の向上につながれば、現状の「学生の奪い合い」といった教員採用の問題も解決の兆しが見えてくるのではないかと考えている。

【参考資料】

- ・ 公立学校教員採用選考試験の実施状況について(平成4～30年度)(文部科学省)
- ・ 国立の教員養成大学・学部及び国私立の教職大学院の平成30年3月卒業生及び修了者の就職状況等について(文部科学省)
- ・ 国立の教員養成大学・学部(教員養成課程)卒業生数等の推移(文部科学省)
- ・ 公認会計士・税理士谷田部博貴「Work-Life Balanceから見る高校教師の魅力」
2019.9.19
- ・ 茨城大学全学教職センター「高校教師の魅力を考えてみよう」アンケート集計結果